
ファーストキス

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファーストキス

【Nコード】

N6434V

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

それは真里菜のキスから始まった

ファーストキス

「あきらさん・・・いい？」

そう言ってすでに家に入ってきている真里菜、彼女は幼馴染で親友の雄太の妹で小さい時からよく遊んだ仲で俺にとっても妹みtainな存在だった。――――彼女も今や俺と同じ高校に通う女子高生、しかも学校では可愛いと評判で俺にまで紹介しと言ってくる奴が出る程だった。――――そんな彼女が俺の目の前でDVD片手に玄関で靴を脱いでいた。その様子を見ていた俺は思わず真里菜に聞いてしまった。

「いいけど、お前んちDVDないのか？」

「あるんだけど、アニキに見られるのがはしくって」

「アニキだと恥ずかしくって俺だいいのか」

俺の質問にウンと頷く真里菜、どうも俺も彼女の行動に弱いのか

「しゃあないな・・・」

「やったあ!!」

そう言ってDVDを持って俺の部屋に走って行く真里菜、しばらくして部屋に行くと真里菜はすでにDVDを見ていた。これがいつもの光景といえ、それまでだが、この日は俺の一言が真里菜を怒らせてしまった。

俺の横でDVDを見ている真里菜・・・ちらっと見るとかなりかわいくなっている。真里菜ってこんなだったっけ？そう思っている
と俺の視線に気付いたのか真里菜チラチラと俺の方へ数回目をむけた。そして俺と目があつたとたん話しかけてきた。

「あきらさん。どうしたの？」

「あっ・・・いや・・・」

俺は思わず目をそらし、どもってしまった。

「あっ？ひょっとしてHなこと考えてるの？」

どき！！な・・・何を言ってるんだ真里菜・・・俺はそんなつもりはまったくないのだがその真里菜の口から”Hな”という言葉が出てくるとは？————はつきり言って俺は焦っていた。

「そ・・・そんな・・・こ・・・ことない・・・だいたい・・・真里菜は俺の妹みたいな感じだし・・・」

そう話した時、「そう・・・」とつぶやいた真里菜は俯いて黙り込んでしまった。そして、膝を立て両手で抱え込こんだ。そして、DVDをじーっと見ていた。

ふと真里菜のことが気になり、DVDを見ている横顔をチラッと見た。その目には涙を浮かべていた。俺は思わずポツリとつぶやいた。

「ごめん・・・いいすぎた」

その言葉を聞いた真里菜は、再び俯き手で涙をぬぐって、俺の方を向いて聞いてきた。

「あきらさん・・・わたし・・・妹なの？」

「あ・・・いや・・・それは・・・」

「じゃあ・・・」

「さっき、真里菜がHなんていうから・・・動揺してだな」

そうだお前があんなことを言わなければ、おれも変なこと言わなくてすんだんだ！！そう思いつつも真里菜の顔が見れない俺は、DVDの方へ視線を向けた。

その時だった。

真里菜が俺の肩に手を置いて話しかけてきた。

「あきらさんっ！！」

声ができる方を向いた俺は驚いた。

真里菜の顔のドアップがそこにあった。しばらく固まる俺・・・
し・・・しかも・・・真里菜の奴、おれの肩に両手をチョンと置いて・・・

しかも上目使いでこっちを見ているし・・・

か・・・かわいい・・・

「は・・・」

思わずテレビの方を向いてしまった。俺は、画面を見て驚いた。

ちょうどキスシーンが・・・

「あきらさんくてば」

軽くをおれの肩をゆする真里菜・・・その声に、ゆっくりと首を動か
し真里菜を見た

しばらく見ていると・・・真里菜は目を閉じた。

おれ・・・どうしたらいいんだ・・・

真里菜の顔が近づいてきた。

俺も思わず目をつぶった。そして、唇にやわらかい感触が・・・
しばらく続いた。

唇が離れたら息を呑む俺・・・こ・・・声のかけ方がわからない・・・

真里菜の少し頬を赤らめ両手で自分の口を覆った。

なんてしぐさするんだ。

真里菜は目をうるませ・・・くるっと振り向いた。

そして立ち上がりこうつぶやいた。

「わたしのファーストキスだから・・・」

そっくり残して、真里菜は部屋を出て行った。

部屋に残された俺は、しばらく放心状態だった。

バカ

あれから数日が過ぎ、いつもの日常が始まっていた。俺の気持ちをのぞいて、しかし、あの日から真里菜も俺のところに遊びに来ていない。そんなある日、登校途中の真里菜を見つけた。気がつくとなんか真里菜を見つめていた。ま・真里菜だ・頼むから気付かないでくれ・そう思っていると真里菜は俺のことに気付いていつものように近づいき挨拶をしてきた。

「あきらさんー！！おはよう！！」

「あ・おはよう・」

ふと真里菜の視線が俺と合った瞬間、思わず目をそらす俺・その行動に怒ったのか真里菜はぷくっとな頬を膨らませた。そして上目使いで俺の顔をじっと見方と思うと足を思いっきり踏んだ。

「痛って！！」

そう叫んでうずくまる俺をおいて真里菜は友達の方へ走っていった。しばらくして、誰かが肩を叩いた。

「何やってんだ？あきら」

見上げると真里菜の兄、陽太が立っていた。

「陽太か・」

立ち上がった俺に陽太がにやけた顔をしている。そして、俺の顔を

指差し、ジーツと見ていた。

「なんだよ。」

「お前、真里菜と何かあったろ？」

「べ・・・別に・・・」

なんてこと言うんだ。俺は顔が少し暑くなってきた。や・・・やばい・俺が思わず目をそらしていると肩をぽんと叩いて、俺を置いて校舎に入って行った。

授業になって身が入らない俺、常に真里菜のことが頭から離れない。どうしたんだ・・・そう思っていると携帯が振動した。ポケットからそっと取り出すとメール着信になっていた。だれからだ？とよく見ると陽太から？ん？と陽太の方を見ると俺の方を見て、手でメール見ろって？んー何々？

「あきら・・・顔に出すぎだぞ！！」

「えっ？」

驚いた俺は思わず大声を上げた。ふと周りを見ると全員が俺の方を注目している。やべーセンコーも見ているし、不適な笑みを浮かべて近づいてくるセンコー、やばい・・・と陽太を見ると無視しやがって。とセンコー目が合った。

「何か質問でもあるのかね、中田君？」

センコーはそう言って、めがねを一回持ち上げあたふたしている俺の机を見回し、開いている携帯を見つけ、それを手にした。

「これは何かな？ 中田君」

「あ・・・いや・・・」

センコーの顔には既に笑みはなく、怒りモード全開だった。

「中田！！！！誰が授業中にメール見ていいって言った！！」

放課後、こっそり1時間説教を食らった俺、校門に真里菜が立っていた。立ち止まりしばらく真里菜を見つめる俺、その時だった。一人の男子が真里菜に駆け寄っていった。しばらく話す二人、声をかけるタイミングを失った俺は、二人の横をスルーパスしようとした。俺に気付いた真里菜が食い下がる男子に

「ごめん、先約があるから」

そう言って、俺の腕をつかんだ。その光景を見た男子は肩を落として俺たちをおいて去って行った。その男子を見て驚いた。今、振った奴ってたしか学校で女子から結構人気のある奴だった。

「真里菜？」

「何？ あきらさん」

俺の言葉を聞いても手を離さない真里菜・・・しばらく俺は真里菜が掴んでいる手をじっと見て黙り込いた。すると、真里菜も気付いたのか、驚いて手を離し、俯きしばらくじっとしていた。

「帰ろうか？」

「うん。」

しばらく、会話がない俺たち・・・ただ・・・黙って歩いていた。

何を考えているのだろうかそう思っているとふと真里菜の言葉を思い出した。先約があるから・・・

「真里菜？」

「なに？」

「先約って？」

しばらく俺の顔を見る真里菜・・・思い出したかのように

「あ・・・先約ね・・・それが？」

「いや・・・何かなと思って？」

「あきらさんところでDVD見せてもらおうと思って。」

「えっ？」

「なに？」

「そ．．．そんなこと初めて聞いたぞ。」

「いつものことじゃない．．．」

「まあ．．．そうだけど」

まずい．．．このまじや．．．話すことがなくなる．．．

「じゃあ．．．いいわよね」

「まあ．．．ところで」

「ところで？」

俺の一言に立ち止まった真里菜は俺の方を見た。

「さっきの奴って？」

「あ．．．あの．．．」

「結構、女子に人気ある奴だろう。」

「まあ．．．」

「付き合ってるんか？」

この一言に真里菜は足を止めた。俺が振り返ると両手で鞆を前に持ったまま、俯いて立ち尽くす真里菜の姿がそこにあった。しばらく、

俯いて動こうとしない真里菜、かすかに震えているようにも見えた。

「本気で・・・そう思ってるの？」

「あ・・・いや・・・」

ま・・・まずい・・・変なこと思わず言ってしまった。そう後悔した俺だがすでに遅かった。

バチーン!!

俺の左の頬に大きな音と悲しい痛みが襲ってきた。左手で頬を押さえ真里菜を見ると目には涙をためていた。

「バカ!!」

そう叫んで真里菜は走り去っていった。

そこにいたのは馬鹿な俺だった。

しばらく、その場に立ち尽くしていたと言うより放心状態で突っ立っていた。やがて、俺は、言ってしまったことを後悔しながらもとぼとぼと家路についた。いつもは何かと寄り道する俺だったが、この日は、まっすぐ家に帰っていた。そして、部屋にいても、何も手に就かず一人ベットの上でた打ち回っていた。その時に机の上の携帯の着信音が鳴った。メールだ。恐る恐る携帯をあけるとやはり真里菜からだった。そこには、

「バカ」

ただそだけが書かれていた。携帯を見て震える俺は、思わず叫んで、ベットにドスンと倒れこんだ。

「あー！！！」

その時だった、ボタンとドアが開いた。そこには、母と妹の理恵が怒った顔をしていた。

「うるさい！！！！」

それから数日間、俺は真里菜と会うことはなかったというかどんな顔をして会えばいいのか。そう考えると見かけると思わず身を隠していた。

なぜ？

おれが

隠れる必要があるんだ？

そこには真里菜の顔を素直に見れない俺がいた。しかし、誰にも言えない。そんなことが頭を離れないまま、廊下を歩いているとぼったりと真里菜に会った。あゝ！！誰か助けてくれ！！どうしたらいいんだ！！俺の心の叫びをよそに何とか出せた言葉が

「真里菜・・・おはよう」

そんな俺の必死な言葉に真里菜はプイッと顔を背け簡単に答えた。

「おはよー！！」

そーいい残し、ずっと俺の横を抜けていった。

・・・

・・・

・
・
・
・
・

なんだ・
・
・

一体なんだ？
・
・
・

この寂しいというか虚しいというか・
・
・

この孤独感・
・
・

お・
・
・おれは・
・
・ま・
・
・真里菜のこと・
・
・

そう思っても手遅れかそう考えながらこの日も下校の時間が来た。

ふと目の前を見るとまた真里菜がいた・
・
・

思わず身を隠す俺。そして、ある男子が真里菜に近づくこの間告白していた奴だ・・・奴は真里菜にやけに馴れ馴れしく話しかけていた。その光景を見ていたら、俺はあることを望んでいた。

真里菜・・・断ってくれ・・・

俺の祈りが届いたのかこの日も真里菜はその男子の誘いを断った。

そこにはほっと胸をなでおろす俺がいた。

帰り道

真里菜が去った後、俺は家に向かってとぼとぼと歩いていた。

バチーン！！

俺の後頭部を衝撃が走った。

しばらく頭を抱えてうずくまる俺

い・・・いて・・・

「何やってるんだ？」

ふと見上げるとそこには陽太がいた。

「おまえな」

「まあまあ」

両手を前に出し俺を制するようににこやかに答える陽太に対して、どつかれた怒りの矛先は全て陽太に向かった。

「大体だなー！！」

俺がそう言いかけた時だった。俺の後ろから声がした。

「お兄ちゃん」

その声に俺はビクツとなった。真里菜だ。・・・俺がゆっくり振り向く、そこには、驚いた表情の真里菜がいた。

「あきら・・・さん」

そうやって俺をじっと見つめる真里菜・・・その目は驚きで少し泳いでいた。俺は、早く逃げたくて仕方がなかった。

「どうした真里菜。戻ってきて」

そう質問したのは、陽太だった。真里菜もその声に陽太のほうを見て

「あ・・・うん・・・学校に忘れ物して・・・」

「そうか・・・じゃあ・・・遅いし、待ってどうか？」

「やめてよく恥ずかしいから」

「そうか？あきらはどうする？」

そんな振り方をするな・・・！！俺は心の中で叫んでいた。

「あ・・・おれ？」

真里菜の方を見ると彼女は俺から目をそらした。

どうしたらいいんだ？

「お・・・おれ・・・いつものところによるから・・・」

俺の言葉に、なんかため息をしたような感じの真里菜・・・彼女を見るとその目は寂しそうに下を向いていた。俺たちの様子を見ていた陽太、やれやれと言った顔をしていた。

「そうか・・・」

そう言うと陽太は、俺の肩を組んで耳元でつぶやいた。

「お前・・・しっかりしろよ・・・」

えっ？俺が陽太の言葉に驚いていると

「じゃあな・・・あきら・・・真里菜はやく帰ってこいよ」

こういう残し陽太は右手を上げその場を去っていった。

取り残された俺と真里菜・・・

真里菜のほうを見ると真里菜はじっと俺の方を見ていた。そして、視線があった時

「「あ・・・」」

俺の声と同時に真里菜の声が聞こえた。その声を聞いて再び俺はどうしたらいいのかわからなくなった。

そして、真里菜も黙り込んで俯いた。そして、チラチラと何度となく俺の方を見ていた。焦った俺は、何とかしないと焦っていると

あることを思い出した。そうだ忘れ物・・・

「真里菜・・・忘れ物って？」

俺の言葉を聞いて、思い出したかのように慌てた真里菜

「あ・・・そうだった。」

そう言って慌てて学校の方へ走り出していった。

俺は真里菜の後姿を見送るのがやっとだった。

いくじなし

しばらく、俺は真里菜が消えて行った方を見ていた。

どうしたらいいんだ・・・俺、そう迷っているうちに真里菜が戻ってきた。

俺を見つけた真里菜は、立ち止まって俺の方をじっと見た。そして、口元に少し笑みを浮べ近づいてきた。

「待ってくれたの？」

真里菜の一言目に無言になる俺・・・なんて答えたらいいんだ。

「あ・・・ああ・・・」

「そう・・・」

真里菜は俺の言葉を聞くと口元からの笑みは消えていた。その目は悲しげだった。

「帰ろうか」

「うん」

やがて俺達は黙って歩き出した。

何とか・・・しないと・・・焦る俺・・・

「そう言えば・・・何・・・忘れたの？」

ビクツとなる真里菜・・・

「あ・・・宿題よ・・・」

「宿題ってひょっとして、」

「そう・・・ムロ先の」

「ああ・・・ムロ先ねえ、あいつ容赦ねえからなあ」

歩きながら俺の方を見つめる真里菜・・・

「先生の言ってたことって本当なの？」

「ああ・・・」

「本当なの？」

「俺がそのひどい目にあった一人だ」

「えっ、うそじゃないんだ・・・」

「マジでやってないとまずいぞ」

「どうしよう・・・」

そう言うとき真里菜は立ち止まった。真里菜を見ると彼女は視線を下に向け不安な表情を浮かべていた。そして、その表情を見た俺も足

を止めた。

「どうした・・・」

「だって・・・できないよ・・・あんなむずかしい宿題・・・」

俺とは視線を合わそうとしない真里菜、明らかにその目は泳いでいた。

「陽太のノート写したらいいんだよ。」

「そんなことできないよ・・・」

首を横に振る真里菜、どう見ても陽太には、飯を作りたくないらしい。弱ったなあ、そう思いながら・・・仕方がない・・・

「ちょっと遠回りだけど俺の家まで来るか？」

「えっ？」

「この間も来ただろう？」

俺は後悔した。それは目の前の真里菜が顔を真っ赤にして俯いていたからだった。

「あ・・・」

言葉を失った俺・・・この間って・・・キスしたんだそう思うと俺もだんだん顔が熱くなってきた。そして、しばらく、二人の間に沈黙が続いた。

ど・・・どうしたら・・・焦る俺・・・そうだ・・・

「ま・・・真里菜、ここで待ってる。」

あっ・・・と言う真里菜は声を上げ右手上げ俺に行くなというそぶりを見せたが、それを無視して俺は、家に向かって走っていった。ダッシュで家についた俺は、例のノートを探した。そして、それを手にして、真里菜が待っているところまで走っていった。

さっきの場所まで戻ると不安そうに一人俯いて待っていた真里菜・・・俺を見つけると少し表情が明るくなった。

「あきらさん・・・」

く・・・苦しい・・・俺はゼエゼエ言いながら真里菜にノートを渡した。

「これ・・・」

そのノートをジーツと見ている真里菜・・・

「問題はほとんど一緒だから写せばいいよ・・・」

俺の言葉を聞いて、視線を上げた真里菜・・・俺の方と見つめていた。

息を切らせながら真里菜を見た俺・・・真里菜の口が少し動いた。

「あきらさん・・・ありがとう・・・」

そう言って、再び真里菜はじつと俺のノートを見つめ、そのノートをぎゅっと胸に抱え込んだ。

目を潤まして俺の方をじつと見つめた。か・・かわいい・・俺はただ真里菜に見とれていた。そして、俺と視線が合うと真里菜は、嬉しそうに目を閉じ頷いて、俺を見つめ返し近づいてきた。やがて、真里菜は目を閉じた。その光景を見て、俺はただ戸惑った。

どうしたらいいんだ！！そう心で叫びつつ思わず

「ま・・真里菜・・じゃあ・・これで・・」

俺の声に目を大きく開けキョトンとする真里菜、その顔は真っ赤だった。そして、再び俯いてしまった。

「お・・俺帰るから・・」

真里菜は俯いたまま何も言わなかった。俺は真里菜を残し、家に向かった。

しばらくして、真里菜からメールが入ってきた。

いくじなし・・

数日後

あれから数日がたったある日のことだった俺はある噂を聞いた。それは、真里菜に告白していた男子がほかの女子を振ったということだった。しかも、最後の台詞がセリフ

「おれ・・・真里菜一筋だから・・・」

こんな言葉が真里菜にも変な噂が飛び火した。そして、放課後、校門で真里菜を待つ例の男子の姿があった。そんなことも知らずに帰ろうとする俺の前を真里菜が歩いていた。

「真里菜さん。」

そう言って近づく例の男子

「おれ、本気です。」

その時だった真里菜は俺に気付いて俺の方を見てプイッ視線を外して彼の手をとった。その瞬間、俺は固まってしまった。何も考えらず、ただ、その光景に怒りすら覚えた。

真里菜・・・行くな・・・

そう心で祈っても、二人は去って行った。

気がつく俺は真里菜の家の前に立っていた。しばらくして、真里

菜は帰ってきた。俺を見つけた真里菜・・・俺を無視して家に入ろうとした。俺は思わず真里菜の手をつかんだ。その手を見て真里菜は、怪訝な顔をして

「何よ」

「待て」

「なぜ？」

真里菜への反論が出来ない俺だったがつかんだ手を離さなかった。

「離してよ!!」

そう叫んで真里菜は俺の手を振り切った。そして、家に入ろうとした。

「待ってくれ!!」

「だから・・・」

真里菜は戻ってきてあきれた表情で俺を見た。言わなきゃ・・・俺は、必死に声を絞った。

「お・・・おれ・・・」

だめだ・・・声が出ない・・・俺の様子を見ていた真里菜の目が優しくなって俺を見つめた。

「お・・・俺・・・」

いざとなるとこ・・・声がでない・・・焦る俺・・・

「・・・」

緊張している俺を真里菜は目を潤ませ指を組み祈るようにじっと見つめていた。

>i29501—3798<

「ま・・・まり・・・なの」

俺をジーと見て一言一言に頷く真里菜

「真里菜のこと・・・す・・・」

その瞬間だった。

「何してるんだ。お前ら」

後ろから声がした。

ドキー!!

俺と真里菜はその言葉で慌てて離れた。振り向くとそこには陽太がいた。陽太はニヤニヤしながら、俺と真里菜を交互に見た。そして、

「お前ら・・・なにしてるんだ」

「な・・・なになって・・・」

黙る俺と真里菜

「怪しいな・・・」

「あ・・・」

声もなく俯く真里菜、俺も何も言えなかった。

「いちゃつくのもいいが、家の前ではやめろ!!」

「あのなあ!!!!」

「お兄ちゃん」

そして、陽太は、俺達をおいて家に入ろうとした。

「じゃあ・・・おっと・・・付き合うのいいが、ちゃんと避妊しろよ!!!!」

「な・・・何を言うんだ!!!!」

「お兄ちゃんのバカ!!!!」

「ジョーダンだよ。ジョーダン・・・じゃあな!!!!」

そう言って、陽太は家に入って行った。

取り残された俺達には気まずい空気が流れ、横に並んでお互いをチラチラ見ていた。なんてこと言うんだ陽太のやつ・・・そう考えて

いると真里菜の口からボソツと寂しい響きが伝わってきた。

「家に戻るから・・・」

「ああ・・・」

「今日は・・・」

その後の声が聞き取れなかった。俺はとぼとぼと歩いてその場を去った。

家についた俺・・・

メールを打った

「ごめん・・・」

やがて真里菜からメールが帰ってきた。

「バカ・・・」

俺は、今日は言えなくてごめんと思っていたのに・・・

真里菜の返事は・・・一体・・・

忘れていたこと・・・

翌日、学校では、真里菜と例の彼との噂で持ちきりとなっていた。相手の彼自身ももう真里菜は自分の恋人とてつきり勘違いしていたようだった。そんなこととは露知らず俺はいつものように学校に出ていた。

「あきら、知ってるか？」

だれだ？と思いきや普段は俺に話しかけてこないお調子者の伸一だった。

「何を」

「陽太の妹のこと」

陽太の妹だ？あいつ俺が陽太と仲がいいから聞いてんのか？

「陽太の妹！？それがどうした？」

「昨日の告白！！！！」

その言葉に俺はドキッとした・・・俺が真里菜と話していたのを見たのか？こいつら？

「それって？」

「お前もいたじゃん？校門で」

「ああ・・・そんなことか・・・」

門でのことね。そう思うと俺は胸をなでおろ、しばらく、伸一から目をそらし、自分の席に向かった。無視していく俺を呆然と見送る伸一

「おい・・・あきら・・・待て・・・」

俺は自分の席に座り、窓の方を見た。結局昨日もちゃんと言えなかった。自分が情けない・・・そう思い机に伏せた。

「あきら!！」

そんな時だった。陽太に呼び出されたのは、

「あきら・・・ちょっと・・・」

「なんだよ陽太」

「お前・・・真里菜のことどう思ってるんだ?」

そう言って陽太は俺の胸をドンと叩いた。

「どうって・・・?」

陽太の奴一体何のつもりだ?

「はつきりしろよ。このままじゃ・・・真里菜はやつのところへ行ってしまうぞ。」

「えっ？」

「好きなんだろう？」

陽太の一言に俺は驚き、慌てふためいて。

「ま・・真里菜は・・だなく・・い・・妹・・み・・みた・・」

俺が言う前に陽太は、背中をバンと叩いた。

「いい加減にしろ!!」

そして、俺の襟首をつかんで

「真里菜を泣かせたら・・ただじゃ・・おかねえから・・」

そういうと襟首をつかんでいた手を振り払って、教室に戻っていった。

放課後、俺が校門まで行くと目の前で真里菜の例の男が話をしていた。

「なあ、真里菜、今日どこ行く」

「行かない」

「何つれないの？ひょっとして、恥ずかしいの？」

「何言ってるのよ。」

「どうして？」

そいつも半分怒り気味で真里菜を見ていた。そこへ通りかかった俺を真里菜は見つけて、俺のほうを見つめた。俺に助けを呼んでいるかのようにそいつも真里菜の視線に気付き俺のほうを見た。

どうしよう・・・そう迷っていると

「あ・・・あきらさん」

そう言って真里菜は俺に近づいてきた。その男は俺と真里菜の間に入り、俺に睨みをきかせた。

「貴様、誰だ？」

「誰って？」

「真里菜とどんな関係なんだ？」

この質問に困った俺は、ふと真里菜の方を見た、真里菜は俺の方を見ているだけだった。答えに困っていると後ろから声がした。

「何やってんだ、真里菜」

俺達が振り返ると陽太がそこに立っていた。その男は真里菜を呼び捨てにされたのがよっぽど気に食わなかったのか。俺達をおいて、陽太の前にまで行って睨みながらこういった。

「真里菜って？お前こそ一体誰なんだ！！」

その様子を見た陽太は、そいつを指差して、ちらっと俺達の方を見た。

「一体誰なんだって聞いてんだろ！！」

その時だった。

「お兄ちゃん！！帰ろう！！」

そう言って真里菜は、陽太を呼んだ。

「えっ！？おにいちゃん！？」

その男は目が点になっていた。

「おう、真里菜、あきら、帰ろうか」

そして、陽太は、その男の肩を叩いて、

「そういうことだ・・・じゃあな！！」

俺達3人は、家路についた。

「もうっ・・・最低！！」

「真里菜が悪いんだろ！！」

そう突っ込みをいれる陽太に

「悪くないもん!!」

「まあゝまあゝ」

俺が二人をなだめようとすると

バン!!

陽太が俺の後頭部を鞆で叩いた。

「痛って、何すんだよ」

「お前が一番悪い!! あっ・・・俺、用事があるから」

そういい残し俺達を置いてその場から去っていった。

やっとの想い

陽太が去って、しばらくの間・・・

俺達の間には会話はなかった。

ただ黙って同じ方向に向いて歩いていった。

しばらくして

「なぜ？」

真里菜がつぶやいた。俺が真里菜の見たとうつぶいて、少し悲しそうに見えた。俺は思わず

「ごめん・・・」

俺の言葉に真里菜は立ち止まって俺の方を振り向いた。その目には涙が浮んでいた。はっとした俺・・・その時だった。

パチーン！！

俺の頬を真里菜の平手が襲ってきた。

「っ！！」

俺は叩かれた頬に手をやり振り返ると目の前で真里菜が俯いていた。

「バカ！！」

「バカって」

両手で俺の胸をたたき泣き始めた真里菜は、

「だってバカじゃない!!」

「・・・」

「だって・・・だって」

そういうながら両目をこする真里菜に話しかけた。

「ごめん」

何度も謝る俺に真里菜は首を振る

「そんな言葉ほしくない・・・」

「・・・」

俺の頭の中は真っ白だった。謝っているのになぜ？

一体どうしたらいいんだ。

俺はただ言葉もなく真里菜を見つめた。

すると真里菜は、俺の胸をドンと両手で突いて走りだした。

俺も慌てて真里菜を追いかけた。このままじゃいけない・・・その

想いが俺を動かした。

「待て!!」

俺がそう叫んでも真里菜は止まってくれない。

俺は、真里菜をしばらく追いかけた。

そして、ようやく追いついた俺は、真里菜の手を掴んだ。

「待ってば!!」

俯いたままようやく立ち止まった真里菜・・・

俺は真里菜の肩に手をやり俺のほうを向かせた。

しかし、真里菜は俯いたまま俺のほうを見ようとしなない。

いざ言おうとすると・・・こ・・・言葉が出ない・・・

しばらく黙る俺達・・・その沈黙を破ったのは真里菜だった。

「な・・・なんなのよ!!」

「・・・」

「黙ってないで何とか言ってよ!!」

そう言って真里菜は俯いたまま俺の胸をドンと叩いた。

「・・・」

しばらくして・・・言葉が出ない俺に・・・

「わたしのこと・・・嫌いな・・・？」

絞り出すような声でつぶやいた真里菜は、俺の胸を叩くのをやめてしまった。

「す・・・好きだ・・・」

言ってしまった俺が驚いた・・・あれだけ必死になって言おうとして出なかった一言がポロツと出た。

「えっ？」

顔を上げ涙目のまま俺を見つめる真里菜

顔がこれでもかというくらい熱くなり、心臓の音が俺の耳まで聞こえた。

そして

再び声が出なくなった俺・・・

「・・・」

しばらく見つめ合っていると真里菜が口を開いた。

「今・・・なんって？」

「・・・・・・」

固まって何も言えない俺

「なんて言ったの？」

真里菜の言葉に誘導されるかのように俺は再びあの言葉がでた。

「す・・すき・・だ・・ま・・真里菜の・・こと・・が」

真里菜は目を潤ませ俺の胸に抱きついた。

俺自身もう何がなんだかよくわからない状態だった。

気がつくと俺は両手で真里菜を包んでいた・・

一体どのくらい時間がたったのだろう・・

胸の中の真里菜がつぶやいた

「あきらさん・・」

その声に俺は両手を緩め真里菜のほうを見た。

真里菜もじっと俺を見つめ両手を首に回してそっと目を閉じた。

徐々に近づく真里菜の顔・・

そのまま俺は震えを押さえ、必死に真里菜とキスをした。

しばらくして、真里菜の唇の感触が離れていった。

この日から俺達の日常が変わった。

数日後・・・

「ごめんなさい・・・好きな人がいるの」

例の男子を振った真里菜・・・

しばらくこの話題で学校は盛り上がっていた。

そんなことは気にも留めない様子の真里菜はいつものように俺の家に来ていた。

「あきらさん、早く!」

そう言って、俺の許可もないまま部屋に向かう真里菜

「また、DVDか」

「ひどい」

真里菜が少しむくれた時、キスをした。

「もうっ・・・もうちょっと雰囲気をだしてよ」

「ごめん」

そう言って俺はテレビの前に座っていると

DVDをセットした真里菜が俺の横にそっと座ると自然と肩にもたれかかってきた。

「真里菜・・・」

「なに？」

「今日の日曜日・・・どっか行こうか」

「うん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6434v/>

ファーストキス

2011年11月11日17時25分発行